

夢中になれることが、人生をこんなに豊かにする

土臭くてラブリーな発掘ドキュメンタリー



2021年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録され、再評価が進む縄文文化。

今から約1万6千年～3千年前に作られた奇妙なデザインの土器や、

どこか可愛げのある造形の土偶の謎は、多くの現代人を惹き付けてやまない。

しかし、本作が光を当てるのは、その「発掘」に魅せられた女性たち。

『草間彌生 わたし大好き』『氷の花火 山口小夜子』に続く松本貴子監督の最新作は、

縄文遺跡の発掘調査に携わる女性たちを3年間にわたって記録したドキュメンタリー。

男仕事と思われがちな遺跡発掘で、汗だくになりながらスコップを地面に這わせる彼女たちが、あなたを縄文時代へと誘う。

ナレーションは「銀河鉄道999」のメーテル役で知られる池田昌子が担当。



四六時中、土に向かい、俯いて作業している。彼女たちそれぞれの人生が素敵に輝いていました。茶色い土ばかりがうつるけど、とてもいい映画です。

樋口真嗣 (映画監督「シンウルトラマン」)

発掘とはさまざまな経験の中から、ある程度の「あたり」を見つけ見えない事は頭の中で探り、その確証を得るために掘るもの。なんだか大人の恋にも似てるなって思う。

発掘している女性達の顔は昔から好きだった人の心を掴んだ時の喜びの笑顔のよう。

違うのはそのドレスが汗だくの作業服って事だけだ。

春風亭昇太 (落語家)



掘る女たち。何かに夢中になってる人独特の、地味で、平和的で、いつもクスクス笑って、とても美しいです。

光浦靖子 (タレント)



最初はみんな宝探し…。でも、30年掘り続けると「3500年前の縄文人が、ずくそこに居る」と実感できるほどのシンクロ率！
驚いた！羨ましい！そして何しろ楽しそう！世界中の人に見て欲しい！！

片桐仁 (芸人・俳優・彫刻家)



ああ、本当に良い映画が産まれたなと思った。きっと土偶も土器も、縄文人も喜んでいるだろう。そうそう、こうやって私ら(土偶とか土器)は、作業員のおばちゃんたち(遺物のお産婆さん)によって、もう一回世界に産み出されたんだよってつぶやきが聞こえた。

譽田亜紀子 (作家/「はじめての土偶」など著書多数)

発掘は可愛いものじゃない。綺麗な服などもってのほかで、時には泥にまみれたり、頭に葉が落ちてきたりもする。だからと言って本作に描かれる女性たちが輝いていないわけじゃない。それどころかピカピカに眩しいくらいに輝いているのだ。正直に言えば何度か思いがけず感動してしまった。これはまごうことなき人生の語だった。

望月昭秀 (縄文ZINE)



山陰遺跡ネットワーク会議「鳥取島根広域連携協働事業」

「掘る女」上映会は、山陰遺跡ネットワーク会議が鳥取島根広域連携協働事業の助成金を受けて実施する事業です。本会議は、鳥取島根両県の各地で、遺跡や文化財の保存活用に取り組む市民グループの連絡組織です。各グループの活性化と各地の遺跡・文化財に対する関心を高めるため、連携していろいろなイベントに取り組んでいます。